

戦術人形に癒されて

Allenfort

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

多忙な毎日、とうとう限界を迎えて倒れてしまった指揮官Ⅱあなた。いつも頑張ってお疲れなあなたを少しでも癒そうと、戦術人形たちが思い思いの方法で疲れを癒してくれる、そんな一コマ。

日常に疲れたなら、可愛らしい戦術人形たちに癒されてみませんか？

目次

アラバイ・オブ・カリーナ	1
ARカフェによるこそ	5
耳かきUMP	10
404 Maid Cafe	15
Girlとだらける日々	21
M4A1の膝枕耳かき	26
AR-15の耳かき、そして添い寝を	31
巡回警備という名のデート	36

ララバイ・オブ・カリーナ

身体が異様に重く感じる。机に転がるエナジードリンクの缶はこれで何本目だろうか。それでも、書類はなくならない。報告書がまだ纏まらない。貴方は時計の針に目をやり、ため息をつく。

0時をとうに超え、そろそろ1時。それも夜のだ。深夜にデスクのライトだけを頼りに本部への報告書をまとめる。度重なる鉄血との戦闘、徹夜で前線で指揮をとって、戻って来れば負傷した戦術人形たちの修復、それに伴う資材の使用量の報告やら戦闘の報告。報告書だらけだ。

そんな最中、パソコンが壊れてしまい、新しいものが来るまで手作業になってしまう。もう指にペンだこが出来て、インクもかすれ始めている。

いつまでも終わらない。終わりが見えないその生活に、底しれぬ闇を感じる。もういい、目眩もしてきたし、なるようになってしまえと、貴方は意識を手放した。

※

どれほど時間が過ぎたことだろうか。意識を手放してしまえば一瞬に思えるその時間。しばらくぶりの柔らかな物の上に寝ているようだ。

枕も、温もりがあつてなんだか落ち着く。規則正しく、頭を撫でる何かはさらに心を落ち着けてくれる。時折聞こえる鼻歌は子守唄か。まるで、子供をあやすようなその優しい歌声に、胸の鼓動も落ち着いたように拍動し、眠りを誘う。

霞む視界が段々とはつきりして来る。変わらぬ執務室の景色だが、この視点は恐らくソファアのあたり。つまり、ソファアで寝ていたのか。ならばこの枕はなんだろうか。視線を動かせば、健康的な脚が頭の下から伸びている。誰かの膝に寝かされていたか。誰だろう。今度は首を動かし、その誰かの顔を見てみる。

「お目覚めですか、指揮官さま？」

それは、貴方の副官であるカーリーナだ。着崩した制服は変わらないが、いつもの活発で澁刺とした雰囲気ではなく、なにやら穏やかで、優しい目をしてこちらを見ている。どうやら、ずっと撫でてくれていたようだ。膝枕をしながら。

「変な音がしたから見てみたら倒れていたんです。もう、何本エナジードリンク飲んだんですか？ 過労の上に慢性カフェイン中毒、その他諸々でかなり体に無理が来ていますよ」

それでも、やらなきやならない仕事がある。体を起こそうとする貴方を、カーリーナが止めるように肩を掴み、再び膝の上に寝かせる。

「今は休んでください。体を壊しているんですから無理はいけませんよ。ヘリアンさん

もこの事を知って青ざめていましたから。しつかり休ませろとのことです」

過労で倒れたなんてヘリアンさんに知られたらなにを言われるか不安ではあったが、どうやらヘリアンさんなりに氣遣ってくれたようだ。ならば、今は甘えてしまおうか。カリーナの誘惑に、抗えなくなりつつある。

「そういうわけで、しばらくの間私たちが指揮官さまを癒して差し上げます。頑張ったご褒美と思ってくださいね」

そつと頭を撫でるカリーナの手が気持ちいい。それが、眠気を誘う。疲労がそれを後押しして、眠りへと誘う。カリーナの歌う子守唄が心を落ち着けてくれる。

撫でる手がリズムを刻むように、それに合わせて聞こえるカリーナの優しい歌声。心を落ち着け、安心させる魔法のような歌声が頭に響き、胸のあたりに何か温かいものが広がるような感覚がする。

頭を撫でられている。それだけなのに、どうしてこれほどまでに心地いいのだろうか。膝から伝わる人肌の暖かさが、じわりと暖めてくれる。それに、縋ってしまいたくなる。

安らかな気分で、久しぶりの眠りに意識を沈める。穏やかな眠りに、疲労が消えて行くかのような気分になる。このまま、この時間が続けばいいのに。

まだ、この歌声を、温もりを感じていたい。それでもこの眠気にはどうしても抗えな

い。視界が暗闇に包まれていく。それでも怖くない。カーリーナの歌声が聞こえるから。カーリーナの優しい手が、頭を撫でていているから。カーリーナの膝の温もりが、頬に伝わってくるから。

だから、この優しい時間に身を委ねて、このまま眠ってしまおう。今は甘えてしまおう。遠のく意識。最後まで聞こえるその歌声に導かれるように、眠りに落ちていく。

眠る貴方をカーリーナは撫で続ける。愛おしそうに、心配そうに。カーリーナ自身も多忙の身ではあるが、指揮官である貴方はそれ以上なのだ。

どうにかしてあげたい。そう思ったカーリーナは一つの答えに辿り着いた。それは、1人では出来ないことであるが、この基地で指揮官を慕うものは何もカーリーナだけではない。

これは、戦術人形たちを巻き込んだ、カーリーナの一大作戦である。

ARカフエにようこそ

クタクタに疲れたあなたは、基地を彷徨うかのように歩いている。目指すは布団だ。体の疲れを癒す布団に救いを求めてしまおう。

このところよく眠れていない。この前だって、夜間に鉄血の陣地を突破したり、正規軍の作戦支援のために陽動をしたりした。おかげで体内時計が狂ったようで、よく眠れなくなってしまったのだ。昼は昼で仕事があるから眠気との格闘で、どうしても仕事に身が入らない。

溜まるばかりの疲労で、ついこの前も倒れたばかりだ。また同じことを繰り返してしまおう。これじゃ部下に示しがつかないと溜息をつき、ぼんやりと歩くあなたの袖が突如引つ張られ、引き寄せられた。

「いらつしやい……指揮官……」

はにかみながらも、あなたの袖を両手でくいつとつまむように引つ張るM4A1は、メイド服に身を包んであなたをカフエに迎え入れようとしている。宿舎を改造したカフエだ。

「お疲れのようですから、少し休んでください」

M4A1の誘いを無下に断る訳にもいかず、あなたは誘われるままに扉をくぐる。そこには、待っていましたとばかりにAR小隊の面々がメイド服であなたを待っていた。「お帰り、指揮官！」

M4 SOPMOD IIは持ち前の人懐っこさであなたの腕に組みつき、ソファアへとエスコートしてくれる。AR-15がそつと椅子を引いて、M16A1はさりげなくメニユーを渡しつつ、いつも通り男前な笑顔を見せてくれる。

姉御肌のM16にメイド服というギャップがまた魅力的で、M4以上に恥ずかしそうなAR-15も清楚なメイド服がよく似合っている。SOPも見て欲しいとばかりにその場でぐるりと回ってあなたにアピールする。M4は穏やかに、あなたに優しい笑みを見せてくれた。

「指揮官、だいぶクタクタじゃないか。また倒れる前にゆっくりして行きなよ。オススメは……AR-15、なんだったかな？」

「もう、忘れたの？ カモミールティーよ。不眠症対策としてよく用いられて、心身をリラックスさせてくれるそうよ。今の指揮官には、それが1番ね」

じゃあ、それにしようか。折角自分のために選んでくれたのだから、きつとよく眠れるだろう。あなたはそんな優しさに今は甘えることにした。甘えることの許されない戦場に身を置いているのだ。今くらい、優しさに縋つてもバチは当たらないだろう。

ちよつと待つてね、そう言つてM4はキッチンへと姿を消す。暖かいカモミールティーを準備に行つたのだ。淹れたてを楽しませてくれるだろう。それが、少し楽しんだ。

「眠れないなら私が抱っこしてあげるのに。指揮官、我慢しないでいいんだよ。」

椅子の後ろからSOPがぎゅつと抱きついてくる。不思議とやましい気分にはならず、むしろ胸のあたりが暖かい感じがして、ポカポカとしてくる。

「うら、SOP……。」

AR-15が少し顔を赤くしてSOPを咎めようとするが、あなたはそれをそつと静止する。悪くない、そう思つていたら、今度はM16が肩を組んできた。いつも通りに豪快だ。姉御らしい。

「じゃあ指揮官、今度は私と晩酌でもどうだい？ 酒飲んで嫌なことは吐き出しちまえば楽になるのさ。いつも頑張つてるんだ。仕事終わりくらい愚痴をこぼしてもいいんじゃないか？」

指揮官としてみんなを率いる立場なのに、部下に愚痴を吐いていいのだろうか。不安にさせてしまいそうでそれはなかなかできない。そんなことを言つたら、M16はやはり豪快に笑つた。

「どこまで真面目なんだい。指揮官が頑張つてるところなんてみんな知つてるんだ。」

むしろ心配なくらいさ」

「指揮官、休息だつて大切な仕事です。私たちのためにも、少しは休んで、息を抜いてください。私たちは壊れても直せませんが、指揮官はそうではないんです」

AR-15がずいっと顔を寄せてきて訴える。確かに、色々抱えすぎたかもしれない。頼つてもいいのか二の足を踏んでいたから、話し相手になつてくれる人は沢山いたのに、頼れずにいたのだ。

そこへ、トレイを持ったM4が戻つてきた。テーブルにソーサーとカップを並べ、カモミールティーを注いでくれる。カップに落ちたカモミールティーの香りが広がり、あなたの鼻孔をくすぐる。硝煙やオイルの匂いではない。ハーブの良い香りが、心を落ち着けてくれる、そんな気がするほどだ。

「どうぞ、指揮官。熱いので、火傷にはお気をつけて」

M4は微笑みながらカモミールティーを勧める。いただきます、そう一言言い、火傷に気をつけて一口啜れば、甘い味わいが口いっぱいに広がる。

「この前、任務の合間に摘んできたジャーマンカモミールです。廃棄された図書館の蔵書に書いてあったので、お疲れの指揮官にと思つて……」

「あの本だね。ローマンカモミールは苦味が強いから、ジャーマンカモミールが飲みやすいんだつて！」

へへん、と得意げなSOPが少し可愛らしくも思える。わざわざ自分のためにここまでしてくれたという事実は、やはり嬉しいものだ。

「私としては眠酒と行きかけたけど、どうもそれは眠りが浅くなるらしくてね。それはまた今度だ」

M16は少し残念そうだ。今度晩酌に付き合おうかとあなたは思いつつ、だんだん眠気が迫ってくるのを感じる。暖かいカモミールティーが体を温め、少しずつ強張つていた体を弛緩させてくれている。

もう少し話をしていたいな。そんな残念な気持ちも堪えて、部屋に帰ろうとするが、立ち上がるうとするあなたをM4は制止して、その体をそつとソファーに横たえさせた。

頭をM4の膝が受け止めてくれる。視界いっぱい、照れて赤くなりそうな顔のM4が見えた。規則正しく、穏やかに頭を撫でてくれる。聞こえてくる、どこか懐かしい子守唄。あなたを癒すためだけに、覚えたのだろう。

「今は、ゆっくり休んでください。私の、私たちの指揮官」

M16は満足そうに笑うと、SOPとAR-15を引き連れて片付けに取り掛かる。あなたはその背中を見送り、M4の優しい笑顔を眺めながら、久方ぶりに穏やかな眠りへと落ちて行った。

耳かきUMP

戦術人形用の作戦報告書を仕上げたカリーナが本部への報告用の書類を手伝ってくれるようになったおかげで、漸く仕事は楽になりつつあった。データルームの設備を更にした甲斐はあり、終わりは見え始めたが、まだ終わらない。

鉄血の襲撃もひと段落した事だ。今のうちに休むだけ休んでおこう。疲れた体で部屋に戻る。そして、扉を開けるとそこには、ベッドの上に座って待つUMP姉妹の姿があった。

「お帰り、指揮官！」

「少し遅いんじゃない？ しきか〜ん」

ここで何をしている？ そう疑問を口にする間も無く、立ち上がった2人に手を引かれ、貴方はベッドに寝転がされる。仰向けの状態の貴方の視界を、何やら笑顔のUMP姉妹が埋め尽くしている。

「カリーナさんから聞いたよ？ 過労で倒れたって」

「そんなんじゃないや早死にするわよ。だから……」

——今日は、私たちが癒してあげる

耳元で甘く、蕩かせるように囁かれ、貴方は思わず身を震わせる。歓喜に似た、くすぐったいような感覚だ。

「指揮官、可愛いね♪ ね、45姉」

「そうね……ちよつと味見したくなるけど、それはまた今度」

そう言いつつ、2人がポケットから取り出したのは耳かき棒。木製で白い梵天のついた姉妹お揃いの耳かき棒を目の前にチラつかせ、優しい笑みを見せてくれる。

「私と45姉の耳かきだよ」

「最近耳かきしてないでしょ？ 無線の聞き逃し多いよ？」

そういえば最近耳掃除をしていない。聞こえが悪くなつたのは確かだし、やることも多く、過労のおかげで耳の痒さに気が向いていなかったのだ。

仰向けで寝る貴方の左に45が、右に9が寝転ぶ。どうやら、この状態で左右同時に耳かきをしてくれるようだ。それはそれで、贅沢な気がする。

「動かないでね？」

「ふふ、まずはここからね」

2人はまるで示し合わせたように、同時に耳たぶを摘み、溝をカリカリと耳かき棒で搔いてくれる。カリカリ、と聞こえて来る小気味の良い音と、擦ったさと痛みの間にあるような気持ち良さが、脳に伝わって来る。

「意外とここも溜まるのよね……45姉、そっちは？」

「すごく取れるわよ。ここまで溜まるなんてね」

継続して聞こえるカリカリという音と同時に快楽が脳に流れ込んで来る。人の欲は尽きないもので、耳たぶでこれだけ気持ちいいのならば中はどうなるのだろう。中を掻いて欲しいと思ってしまう。

そして、意識すれば痒みが出て来る。そんなもどかしさが顔に出てしまったか、2人はくすりと笑った。その吐息が耳にあたり、気持ち良さとむず痒さが同時に脳を犯す。

「もう我慢できない、って顔ね……♪」

45はまるで焦らすように耳孔近くをへら先で刺激する。それを9も真似しだして、もどかしくてたまらない。どんどん痒みが増していくような感覚がする。

「可愛いなあ……ほら、指揮官……♪」

「お楽しみ時間よ……♪」

漸く2人が耳かき棒を耳孔に入れ、浅いところからへらで掻き始める。ちょうどいい力加減で擦られ、快楽が増す。耳掃除というよりマッサージのようだ。

「うわあ、まだ手前なのに凄く出てくる……もう、サボりすぎだよ？」

「それとも、耳かきできないほど忙しかったの？」

9は取れたものをティッシュに乗せ、さらに耳孔を程良い力加減で掻いてくれる。4

5も、細かい垢を一箇所にかき集めて、それをまとめて取り出すかのような動きで耳かき棒を動かす。巧みな腕前だ。

「ちよつと奥をやるからね」

「動いちやダメよ、しきか〜ん?」

耳元で囁かれ、吐息が耳にあたつてくすぐつたい。2人の耳かき棒はさらに奥へと入り、へばりつく耳垢を剥がそうと掻き始める。待望の瞬間に、快樂が洪水のように襲ってくる。

カリ、カリ、そんな音が鼓膜へ響き、2人に与えられる気持ち良さが体を震わせる。左右からの同時攻撃。耐えられるわけがない。

密着する2人の温もりが、吐息が伝わる。心地よさも加わり、自分のために一生懸命になつてくれる2人に愛おしさがこみ上げる。

カリツ、そんな音がある。どうやら2人とも同時に耳垢を捉えたらしい。ヘラ先を巧みに操り、痛くないように耳垢を剥がすその作業は、痒いところを掻くかのようにだ。待つていた待望の瞬間に、快樂がまた溢れる。

へばりついていて耳垢が剥がれるような感触。2人の慎重な手つきが伝わってきて、次の瞬間歓声が上がった。

「取れたよ!」

「もう、大物残していたのね。これでよく聞こえる?」

2人の声がよく聞こえる。やりきった2人は最後にふー、と吐息を耳に吹きかけてきた。くすぐったさに貴方が体を震わせると、2人はニコリと笑っていた。

「ふふ、気持ちいい?」

「可愛いんだから……9、もう一度やるわよ」

ふー、2人の吐息が掛かり、また体が震える。そんな気持ち良さそうな貴方を、姉妹はそつと抱きしめた。

「いい機会だし、このまま寝ちやおうよ」

「そうね、そうしましょう。ほら、UMPサンドよ、しきかくん?」

優しい2人に挟まれ、あなたは眠りに落ちてしまう。暖かな2人に抱きしめられ、いつもよりゆつくり、安らかに眠れた気がする。

404 Maid Cafe

夜の基地、全ての灯りが落とされ、何も見えない、原初の闇に包まれた基地はまた違った顔を見せてくれる。明け方に攻撃に出る関係上、起きて時間まで待機していることになったのだ。

空襲を少しでも避けるための灯火管制により、最低限の機器を残して消された灯り。闇は人に恐怖を思い出させる。野生の記憶なのだろう。

そんなあなたの視界に、何かがぼんやりと見える。闇に紛れるような黒に、何かがフラフラと蠢いている。なんだろう。

よく目を凝らして見る。そのシルエットには見覚えがあつた。長い髪をツインテールにまとめた少女の姿に、あなたは少し安心感を覚えた。

「指揮官っ！ 今大丈夫？」

UMP9はあなたの顔を覗き込むように、屈託のない笑みを向けて問いかける。その隣からも、サイドテールの少女UMP45が姿を現わす。どこに隠れていたのかは聞いても教えてくれないから、最近では驚かされるばかりだ。

「しきかくん、少しだけだから、ね？」

45はイマイチ何を考えているかわからないが、まあ大丈夫だろう。長い付き合いで信用しているあなたは、2人についていくことにした。眠気覚ましにも良さそうだ。

2人に手を引かれて行く先は、やはり宿舎。カフェに改造されてからと言うものの、戦術人形たちの道楽でよく使われている。

一枚噛んでいたカリーナもカリーナで、よくやろうと思ったものだ。落ち着いた雰囲気の内装が気に入っているのは内緒だ。

電気をつけられないからか、テーブルにはキャンドルで明かりが灯されている。昔ながらの方法ではあるが、とても風情のある光景だ。

灯りに照らされて見えたUMP姉妹は、黒を基調としたメイド服に身を包んでいる。クラシカルなロングスカートのメイド服で、とても似合っていた。

「お疲れ様、指揮官」

奥から現れた416もメイド服を着ていた。皺一つないよくアイロンをかけた服を着こなしている。完璧主義の416らしい。意外とメイドが似合ってるのかもしれない。

「当然ね。私は完璧よ」

確かに完璧なメイドだ。G11はどこだろうかと辺りを見回してみると、奥のソファで寝ているG11の姿があった。ヘッドドレスは取れて、首元のボタンも外して

いる。416が睨んでいるのが見えた。

助け舟を出そうと、あなたはG11のいるソファーに移動し、座るついでに膝にG11の頭を乗せる。まるで猫のようで、少しだけ安らいだ。

「甘いんじゃないの？ いつも寝てばかりだと言うのに……」

文句を言う416だが、なんだかんだ言っただけ起こさないのは優しさだろうか。微笑ましく思っていると、UMP姉妹が何やら飲み物を持ってきてくれた。45がコーヒー、9はお菓子のスコーンをトレイに載せている。

「指揮官！ これをどうぞ！」

「404オリジナルブレンドにチョコチップ入りのスコーンですよ。たまには味わって食べたなら？」

このところ、あまりの多忙さに食事を味わう間も無く掻き込む日が続いていた。それをみんなは見えていたのだろうか。

猫か犬か、よく懐いているUMP姉妹の気遣いがありがたく思いながら、まずはスコーンを一口齧ってみる。プレーンの生地の素朴な味わいにほんのり感じる甘さ、ビターなチョコチップが絶妙なバランスで程よい甘さを作り出している。

ただ、やはり口の水分がとられてしまう。そこでコーヒーを手取る。そのコーヒーは404小隊のエンブレムがラテアートで描かれていた。時間をかけて作ってくれた

のだろう。飲むのが惜しく感じてしまうが、形あるものはいずれ滅びるもの。飲まない方が失礼だ。

お礼を口にして、穏やかな気持ちで一口啜れば、コーヒーの香りが鼻孔をくすぐり、クリームがコーヒーの苦味をほどよく抑え、旨味を際立たせる。そして、喉を通るコーヒーが、体を芯から温めてくれるような感覚がした。

美味しい、そんな言葉が口から漏れ出し、UMP姉妹の顔がみるみる笑顔に変わる。普段は無表情を貫く416も、今ばかりは本当に僅かばかりの笑みを浮かべていた。きつと、作るのに頑張ったのだろう。

ありがとう、またあなたの口から感謝の言葉が漏れ出す。今できるお返しはその言葉だけなのかもどかしくも思えるが、彼女たちは満足そうに笑ってくれた。

「当然よ。私は完璧だから」

「……焦がして涙目になってたのに」

いつの間にか目を覚ましていたG11が茶々を入れると、416はみるみる顔を赤らめ、キツとG11を睨み、両頬をつまんで引つ張る。

「苦手は克服したの……! あんたは寝てばかりでしょう……!」

「痛いよ……ラテアートやったもん……」

このラテアートはG11の作品だったようだ。このクオリティは凄いと感心したあ

あなたは、今度好みの絵柄のラテアートをやってもらおうかと思案する。

頬を摘まれて涙目のG11を救うべく、あなたは手を差し伸べる。G11と416の頭をそつと撫でてやると、416は手を止めて大人しく撫でられる。嫌そうにしている。G11も撫でられているうちにすぐ寝付いてしまった。

「……私の価値、ようやくわかってくれたの？」

そう言つて顔を覗き込んで来る416も、膝でスヤスヤ眠るG11も、まるで猫のように思えて可愛らしい。UMP姉妹も虎視眈々と狙っているかのような目をしていたので、隣の席を勧める。

9が隣に座り、さらにその隣に45が座る。2人とも、何やら楽しそうに笑っていた。戦術人形なんて忘れてしまうほどに、可愛らしい女の子に見える。

「まだ時間あるから、ゆっくりしようよ、ね、指揮官！」

「そうね。もう少し長生きしてよ、しきかくん」

「……指揮官がいないと、甘やかしてくれる人がいない」

「G11はすぐそこをどきなさい。指揮官は私のもものなの」

珍しく416がああなたの腕をG11から奪い取り、抱きしめる。たまに見せてくれるようになった可愛らしい一面が、なんとも愛らしくてたまらない。

今夜は退屈せずに過ごせそうだ。願わくば、この戦争が終わったとしても永劫に、彼

女たちと生きられたなら。

G11とだらける日々

欧州北部、緯度の高い位置にあるこのS09戦区の冬は寒い。だから、カリーナの斡旋でこんなものを言い値で買ってしまおうのも無理はない。

はるか東、極東の島国に伝わるといふ最高の暖房器具、コタツ。机に布団を乗せて熱を逃がさないようにシャツトアウトしつつ、ヒーターを組み込んだ原始的な暖房器具である。

だが、これがまた謎の魅力を誇り、一度足を突っ込んだが最後、底なし沼のように抜け出せない。出たら最後、極寒の自然が待つのだ、出たくもなくなる。

そんなあなたの隣では、最早お約束とばかりに銀髪の乱れ髪が特徴的な戦術人形G11がスヤスヤと眠っている。何かいい夢でもみているのか、ニヤケながらモチモチほつぺを膨らませるその姿がなんだか愛らしく思える。

あなたの腕を枕に、心地よさそうに寝るG11を見てみると、あなたにも睡魔が訪れる。一緒に寝ようと誘われているかのような気分だ。乗ってしまうのも悪くない。働き詰めだし、バチは当たらないだろう。

腕枕のお返しに、あなたはG11を抱き枕にして再び居眠りを始める。このクソ寒い

中では鉄血人形の活動も鈍っている。あまりの寒さにセンサーが凍るのだろうか。アンチアイス切るからだ。

それとも、バッテリーが持たなくなるのか？ だとしたら、奴らはリチウムイオン電池でも積んでいるんだろ。そんなくだらないことを考えていたら、いつのまにか体は眠りに落ちてている。眠りなんて、いつもそんなものさ。

※

ふと目を覚ますと、G11の瞳が見えた。いつも眠たげに閉じられている茶色つぼくて可愛らしい瞳がある。自分より先に起きているなんて珍しい。

「おはよう、指揮官」

「何？ 私が指揮官より先に起きてるのが珍しいの？」

「たまにはそういう時もあるよ。指揮官と遊びたい気分だし」

そう言うG11の手には2台の携帯ゲーム機が握られている。あなたと遊びたくて、早起きして待つていたようだ。

そのゲーム機を受け取ると、G11は嬉しそうに笑う。休暇と一緒に遊んで過ごしたいと眠気を我慢したのだ。嬉しそうなG11の姿に、思わず心が温まるような気がした。

暖かいコタツの中で、のんびり2人でゲームというのもなかなか楽しい。G11は

普段寝てばかりだがやるときはやる。ゲームでもその無類の強さを発揮し、あなたを驚かせる。

「指揮官、また私の勝ちだね」

何度対戦してもG11相手に歯が立たない。容赦が無さすぎる。いつものダラケ具合からは想像がつかないほどの判断力の速さだ。それがG11のいいところでもあるのだろう。

一緒にお菓子を摘み、ジュースを飲んで暖かなコタツに寝転がってゲーム。なんと贅沢なのだろうか。それに、にへへと笑うG11が可愛らしく、思わず胸がキュンとしてしまいそうになる。

こんなG11のほんわかムードに当てられて、仕事を忘れて和んでしまう。そんな日も、案外悪くない。そのうち、ゲーム機は充電切れになってしまい、またやることなくなる。退屈になると、G11はあなたの腕をとって寝転んだ。

「指揮官、お昼寝しよう。ゲーム機もお昼寝してるよ」

さつきまで寝ていたのに、というのには抜きにして、仕事詰で疲労のたまっていたあなたはそれに乗り、一緒に昼寝をすることにした。

また腕枕を要求されるだろう、そう考えて腕を伸ばしてみたが、予想に反してG11はあなたの胸に顔を埋め、抱き枕がわりにした。

これはさすがに、とは思うものの、とてもいい笑顔で寝始めたから起こすのもかわいそうだ。このまま寝かせてあげようか。

まるで小動物のような可愛らしさのG11。あなたの胸の中で無防備にスヤスヤと眠っていて、コタツとはまた違う温もりが伝わってくる。

ちよつとほっぺをつついてみれば、とてもモチモチで柔らかい。癖つ毛の頭を撫でてやると、気持ちよさそうに声を漏らす。

そんな時、部屋のドアが開いて銀髪ロングが特徴的なHK416がやってきた。何やらバインダーを持っているあたり、書類だろうか。

「指揮官……またこの寝ズミは……しかもどうして指揮官に……」

少し表情を曇らせる416に危機感を覚えたあなたは落ち着くように促す。416もいつものことかため息をつくくと、天板にバインダーを置いてコタツに滑り込んだ。G11とであなたを挟むように。

「仕方ないわね。起きるまでよ」

まるで、自分に言い訳するかのようにも聞こえる。なんだかんだ言いながら416もあなたの背中にしがみついてウトウトとし始める。

縋り付くように姿勢を直し、顔を埋めようとするのがくすぐったい。G11にもがちり抱きつかれているから、抜け出すことはできない。それに、コタツの暖かさもあな

たを捕まえて離さない。

まあ、今くらいは誰も文句を言わないだろう。G11と416の添い寝という、少し贅沢な状態で居眠りをするある日。それは、前線にしては珍しい日だった。きつと、頑張る自分へのご褒美なのだろう。

後日、M16によってこの光景を撮影されていたがために416が大喧嘩をやらかしたのだが、それはまた別の話である。

M4A1の膝枕耳かき

今のご時世、安定した仕事であるPMCのグリフィンなのだが、指揮官の選抜過程は群を抜いて厳しく、なれるものはほんの一握りだという。

受かったことは誇りたいが、少数ゆえに仕事はどうしても溜まる。分散するほど人がいないのだ。副官のカリーナもパンクしそうで、休みを多めに取らせてやらないとそろそろ倒れてしまいそうだ。

その優しさで自分の身が削られていくのだが、そこは目を瞑ろう。いたいけな少女に苦しい思いはさせたく無い。結果としては、今度はあなたがパンクしてしまったのだ。体が重い。ストレスのせいか、寝ても途中で起きてしまい、疲れが抜けない。その度のために息を漏らす。嗚呼、早く夜が明けないだろうか。

コンコン、と扉がノックされる音が聞こえた気がした。こんな時間に誰だろうか。返事をする、扉をあけてM4A1が姿を現した。

「何か苦しそうな声が聞こえたのですが……大丈夫でしたか？」

どうやら、たまたま廊下を歩いていたM4に聞こえるほど大きなため息だったようだ。まさか聞こえているとは思わず、情けない姿を見せたことを恥じるあなたにM4は

そつと微笑み、手を握ってくれた。

「大丈夫です。指揮官はいつも頑張っていますから、仕方ありません。少しくらい肩の力を抜いてください」

「今日は、私が指揮官を癒しますね」

いつもは奥手な方のM4がやけに積極的だ。それでも、笑った顔が可愛らしかったから、何も言わずに癒されることにした。

M4はそつとベッドに腰掛け、膝を叩く。頭を乗せろということだろうか。ニコリと笑うM4が早く来いと急かすようにも見える。あなたはそんなM4に甘えて、膝に頭を乗せて寝転ぶ。

「指揮官、まずはお耳をマッサージしますね」

M4はあなたの耳たぶをこねるようにマッサージする。人差し指と親指の腹で挟むように、伸ばすようにマッサージする。その度に心地よいノイズが鼓膜をくすぐり、適度な力が耳たぶに心地よさを感じさせてくれる。

「指揮官、耳にはツボがいっぱいあるって知っていますか？ 疲労に効くところ、押しま
すね」

M4の適度な力加減でのマッサージがたまらなく気持ちいい。潰して伸ばす、そんな感触で、痛みが気にならず、気持ちよさだけが伝わってくる。

疲労に効くというツボをM4は適度な力で押ししてくれる。そんな心遣いが暖かく心に染み渡る。健気で、放つて置けない。そんなM4が今は止まり木になつてくれているのだ。

「ふふ、表情が緩んでいますよ。気持ちいいですか？」

M4はやけに楽しそうにしている。マッサージはそろそろ終わりなのか、不意に耳たぶの感触が消えて、代わりに細い耳かき棒が耳たぶの溝に当たった。

溝に溜まった垢をカリカリと掻き始める。ザツ、ザツと聞こえる音、ヘラ先のちょうどいい圧力が気持ちいい。ヘラの側面を駆使して、ツボを押すような掻き方。これだけでも気持ちいいが、やはりもどかしい。

「指揮官、もう少し我慢してくださいね。ここが終わったら、中を掻きますから」

クスリと笑うM4の声が聞こえる。あなたの反応を見て楽しくなってきたようだ。耳たぶが気持ちいいが、やはり中の方がむず痒くなってくる。我慢してはいるが、足がどうしてもモジモジとしてしまう。

ふふ、とM4は穏やかに笑い、とうとうその耳かきを耳孔へと侵入させた。待ちかねていたその感覚に、電気が走るかのような快樂が流れる。思わず体を強張らせ、快樂に震えてしまう。

M4はどこか嬉しそうだ。あなたが気持ちよさそうだから、それに喜んでいるのだろ

うか。浅い部分を細い耳かき棒で丁寧に搔いて、へばりついていた耳垢を取り除いてくれる。剥がれるその瞬間に生み出される快楽に思わず声が漏れる。

「動かないでくださいね……取れた!」

取れた獲物をM4は慎重に取り出す。結構な大物のようだ。M4の嬉しそうな声ではあるが、耳垢でそんな声を出されても複雑である。

ただ、M4がこんなに嬉しそうなのは久しぶりだ。楽しいのならないかもしれない、自分も気持ちいい。

M4は再び耳かきを耳孔へ入れ、探るように軽く搔く。表面を撫でるようで、これも少し気持ちいい。怪しげなところを少し強めにへら先で押されると、まるでツボ押しのようにまた違う気持ち良さが伝わる。

まだ右耳。それでも結構な気持ち良さだ。そろそろ終わりなのか、耳かき棒が引き抜かれていく。少し残念だと思っていた矢先に、今度は柔らかい感触が耳の中に入ってきた。

耳かき棒の反対についてきた梵天だろう。それをくるくる回しながら耳に入れられ、まるで擦られるような心地よさを感じる。

「梵天です、これが気持ちいいって姉さんが言っていました。私も、よくしてもらっていたので」

M4の耳かきはM16仕込みなようだ。あの姐御肌で大雑把そうなM16か耳かきとは、また意外な一面もあったものだ。

心地よいノイズと柔らかな梵天の感触。もうすぐこれも終わりかと思うと憂鬱になつてしまいそうだ。楽しい時間はあっという間に終わってしまう。

ヘラの刺激とはまた違う、柔らかな梵天。撫でられるようで、これも心地いい。そんな時間ももうおしまいのようで、梵天が耳から引き抜かれていく。名残惜しそうにするあなたに、M4は笑みをこぼしていた。

「指揮官、まだ反対がありますよ。でも、それは交代してからです」

扉が開く。AR―15が素早く入ってきて、隣に腰掛けた。どうやら、左耳はAR―15がやってくれるらしい。偶然か、狙っていたのか。

「指揮官、今度は私が癒しますね」

AR—15の耳かき、そして添い寝を

AR—15の膝に頭を乗せ、左耳を向ける。目の前にはM4が添い寝するように寝転んで頭を撫でてくれるのが心地いい。AR—15に軽く耳たぶを引っ張られ、耳を奥まで見られるのは少し恥ずかしい。

「指揮官は右利きでしたね」

それがどうかしたのか、問いかければやっぱり、と呟くのが聞こえた。

「左にはだいぶ溜まっています。逆手のほうだからやりにくかったのでしょうか？」

全てをお見通しというわけだ。指の腹で耳たぶを揉まれるのがなんと気持ちいいとか。そして、サイドテールを耳にかける仕草が可愛い。

真面目な性格のAR—15が見せる微笑みが可愛い。近くで見ると、これほどまでに美少女だったのかと改めて思わされる。

「今綺麗にしますね。動いてはダメですよ？」

「その間は私を見ていてくださいね」

膝枕で耳かきをされるあなたの目の前でM4が添い寝してくれている。優しく手を握り、微笑むM4に思わずどきりとしてしまう。

そして、とうとうヘラが耳孔の入り口を搔き始めた。どうやら、ヤスリで細く削ったらしい。とても細くて、ピンポイントでツボを押されるような気持ち良さがある。こちよこちよとくすぐられるかのような擦ったさと、気持ち良さが同時に襲ってくる。

「もう、結構取れますよ。自分で出来ないなら私に頼んでください。指揮官の頼みならばいつでも……」

「指揮官、私もしますからね。M16姉さんも指揮官になら喜んでやるでしょうし…… SOPは少し不安ですけど」

SOPはどちらかといえばされる方ではないだろうか。ちよつと不安だということも否めない。M16は……少し雑そうだ。

目の前のM4があなたの頬を包み込むように撫でてくれる。そつと微笑むその顔は可愛らしい。それに、ちよつと嫉妬したのかもしれない。AR—15の吐息があなたの耳に吹きかけられた。

「ふふ、可愛いですね。ほら、取れましたよ」

さつきまでカリカリと引っかかっていたものが剥がれ、耳から取り出される。その瞬間が気持ちよくてたまらない。そして、気持ちよさそうなあなたを見てAR—15も満足そうだ。

取れた耳垢をティッシュに乗せ、また耳を搔き始める。それが気持ちよくて、思わず

M4の手を強めに握ってしまった。

指を絡める、恋人繋ぎというやつだ。M4もなにやら嬉しそうに握り返してくる。手から、暖かみが伝わるようだ。

「M4、今は私の番」

「少しくらいいいでしょう?」

「もう……」

AR—15は耳かき棒を置くと、綿棒に持ち替える。ベビーオイルに浸した綿棒で、細かいのをまとめて取ってしまうつもりようだ。

人肌程度に温められたそれは、結構気持ちいい。気持ちいいとはいえ、ヘラで引っ掻いた耳は多少なりとも傷つく。それをケアするようで、心地いい。

濡れ綿棒は細かい耳垢をまとめて取り去る。耳かき棒で取るような気持ちよさはないが、綿棒で耳を撫でるような気持ちよさは、これはこれで気持ちいいものだ。

「指揮官、私もお役に立てていますか?」

AR—15は本当に役立っているか不安なのだろうか。こんなに気持ちいいのに、何故そんなに不安に思う必要があるのか。

あなたがそれを言葉にすると、AR—15がくすりと笑ったように思えた。膝枕で耳かきされているから表情は見えないが、微かにそんな感じがしたのだ。

「大丈夫、指揮官、すごく気持ちよさそうよ」

M4はくすりと笑って言う。普段ならこんな顔を見られるのは恥ずかしいのだが、彼女たちになれば見られてもいいと思えてしまう。

M4がさらに身を寄せてきて、あなたを抱きしめようとする。すんでのところでAR—15がM4の額を叩いて阻止してしまった。

「危ない。まだ耳かき中よ」

「なら、もう少ししてからね」

もう少し続いて欲しかった耳かきもとうとう終わりを告げ、綿棒は引き抜かれる。名残惜しさを感じていると、AR—15はあなたの頭を膝から持ち上げ、そつとベッドに降ろさせた。

そして、隣にAR—15は寝転ぶ。M4と一緒にあなたを挟み込むように添い寝しているのだ。気恥ずかしい気もするが、暖かい気持ちにもなる。

左右からまるで取り合いのように抱きつかれ、緊張してしまう。両耳に吐息が当たり、鼓膜をくすぐられるかのようだ。

さらに、左右同時にぱくりと耳たぶを啜えられた。舌が擦りたい。暖かみと共に擦つたさに襲われるが、逃げられないようにM4もAR—15もしつかりとあなたを抱きしめている。

もはや蹂躪されるばかりだ。あまりの快楽に耐えられそうにない。心臓は早鐘を打ち、挟まれて動けないもどかしさが募る。

ようやく満足したらしい2人は口を離すと、そのまま頬に同時に触れた。唇の柔らかさが頬から伝わり、状況が読めずにあなたの思考は一瞬停止してしまう。

「体には気をつけてくださいね、指揮官。私たちも心配してらんですよ。SOPもMI6姉さんも、倒れるんじゃないかって心配していたんですから」

「私たちがいるんだから、もつと頼ってください。いつでもそばにいますから」

2人とも、笑顔を見せてくれていた。今は優しさに甘えて、ゆっくり休んでいいだろう。頭をそつと撫でられて、顔が触れるほどの距離で包まれて、守られている安心感に抱かれながらゆっくり眠ってしまおう。

眠りに落ちる寸前に、また頬に柔らかい唇が触れる。そして、こそばゆい囁きだけが最後に耳に残っていた。

——大好きです、指揮官

巡回警備という名のデート

PMCは地方都市の治安維持や行政サービスを国家から委託されているため、鉄血と戦う他にも都市の警備というのは大切な仕事だ。

普段は戦術人形に巡回警備をさせているのだが、この日は指揮官自身とAR―15がバディで巡回警備を担当することになっていた。

それも、民間人に紛れるようにカジュアルな服装をして、武器もギターケースに隠している。民間人を装って警備というわけだ。

「指揮官、どうして私までこんな格好を？」

AR―15は女学生風の衣装をまとい、どこか落ち着かなそうな様子だ。ペルシカが用意していたAR―15用の衣装がこれだったのだから、指揮官にはどうしようもない。

「ペルシカさんに文句言ってくれ。俺はカリンに売りつけられた」

指揮官は戦闘時にも動きを阻害しないよう、ストレッツチ生地ジーンズにグレーのパーカーという出で立ちだ。指揮官はいつもギリ―フードを四六時中被っているから、素顔を曝け出している姿が、AR―15には新鮮に見える。

それに、パーカーもブレザーも脇の辺りに取り付けた拳銃を隠しておくにはもつてこい。良い選択だったといえよう。

「カリーナさんのファッションセンスも捨てたものではないですね」

「俺は戦闘服か、あのフードがなきや落ち着かん」

「そろそろ慣れてください。もう狙撃兵じゃないでしょう?」

「今は、な」

そんなやり取りをしつつ、手ぶらの警備は続く。AR—15は指揮官がいつもに比べて近いように感じ、一瞬メンタルがおかしくなりかけてしまう。冷静さを崩してはならない。その筈なのに、頬が赤くなるのを止めることができないのだ。

「指揮官、近いですよ……!」

「この方がいい」

「なっ……!?!」

AR—15の顔が一瞬で赤く染まる。それこそ、彼女の髪の毛以上に。AR—15のそんな乙女心を知るよしもない指揮官はただ、いつも通りの鉄仮面を貼り付けていた。

「この方が戦術人形だと気付かれにくい。人形に人間に向けるような感情抱くのは変人つてのが一般的らしいからな」

「……わかっててやってるのね」

AR-15はわずかに頬を膨らませる。あからさまに不満だと言いたげだが、指揮官は周辺の警戒をしていて、灯台元暗し。そんな表情には気付いていない。

「まあな、それに職員どもから人形性愛者って言われているのもよく知ってるし」

今度こそAR-15は嘖き出す。指揮官は恥じることも隠すこともなく、ちよつと売店行つてくるくらいの気軽さで言い放つたのだ。

職員から異常性癖と陰口を叩かれ、何故か制服の上でもギリーフードを常に着用して変人扱いされ、それでも尚動じない。どれだけ図太いのだろうか。

「……いいんですか？」

「ああ。実際この所は人形と任務を共にすることの方が多しな。情も移るさ」

最早AR-15には巡回警備どころではなかった。指揮官は本当にそういう趣味なのだろうか、だとしたら自分にもチャンス……違う、そう見られている可能性はあるのかと考えてしまう。

「ならばフードはどうしてですか？あれは文句のつけようがないほど変人みたいですけど」

「……俺は機械じゃねえから、覚えていられることには限りがある。忘れたくないのさ。死んでいった奴らのことを」

「あのフードが？」

「死んだ仲間の血をひと掬いずつ塗ってきた。目立たないけど、俺が行き着く先まで連れて行ってやるために」

嗚呼、やはり指揮官はそういう人だ。やはり変人だ。そして、底抜けに優しすぎる。

「なら、私が死んだら連れて行ってくれますか？」

「ああ。だが俺の方が先に死ぬだろうさ。なんとたつてヤワな人間だしな。すぐ死んじまう」

だから人間は嫌なんだよ、と指揮官はクスリと笑った。そう、機械の私なら、彼にくらでもついていける。

AR—15はそれを少しだけ誇りに思っていた。そんな指揮官と雑談をしながらの巡回も、前に見た映画と照らし合わせたなら、デートとでも言える代物なのだろう。

あとは、何か甘いものでもあればいいかもしれない。きつと帰ってからヤキモチを妬かれるかも知れないが、それは任務を共にした者の特権だと思ふ事にしよう。

「指揮官、そろそろお疲れでしょう？あそこで休憩していきませんか？」

AR—15は指揮官の袖をくいくいと引いて、とある店を指差す。

この地区はグリフィンのスポンサーでもある富裕層が住んでる地区でもあるため、難民地区や一般の地区とは店がまた違う。パティスリーなんて最たるものだろう。

AR—15が物をねだるとは珍しい。それを無下にすることもなからうと、指揮官は

コクリと頷く。別にやましいことはない。仕事中の休憩時間くらい確保されてしかるべきなのだから。

誘われるままに店に入った指揮官はその内装に思わず感心した。昔のような木製の内装に暖色系の照明、古いクラシック音楽と、シックな雰囲気でも落ち着く所だ。

「良さそうな店だな」

「そうですね……指揮官、これは……」

AR―15の呂律が何故か回っていない。声帯モジュールにバグでも起きたのかと指揮官は疑いつつ、AR―15の指差すプレートを見てみる。

何やらキャンペーンをしていたらしく、カップルは2個目のケーキが無料だということなるほど、カップルに偽装しているから確かにそう見えるだろう。これはお得だと指揮官は思う。

だがAR―15がバグる理由は今ひとつわからない。本当にバグならばチョップで直そうかと思案しつつも、その目線はプレートからケーキへと移っていた。

「……選ばないのか？」

「し、指揮官!?!何を見ていたんですか？」

「ケーキ」

「も、もう!」

顔を赤らめたAR-15は慌てているのか怒っているのか今ひとつわかりにくい。とは言えケーキの魅力には抗えないらしく、すぐに指揮官共々ショーケースに釘付けになってしまっていた。

漸く目標を決めた2人は店番の人形に飲み物とケーキを注文し、窓際の席に着いていた。空は珍しく晴れていて、日差しが心地いい。

頬杖をついてぼんやり空を見る指揮官を、AR-15はただ静かに見つめていた。普段はフードで隠された彼の横顔を目に焼き付けておける事が、何よりも嬉しかったのだ。

他の人形以上に彼を知っている。そんなささやかな優越感。そして、自分だけがそれを知っていればいい。自分だけでいいというささやかな独占欲。

今の再生技術なら消せるはずの顔の傷を消さず、鋭い目を今は穏やかにしている姿を、ぼんやりと眺めていた。

ロシアではあまりに目立ちすぎる黄色味がかった肌、短く刈りそろえた黒髪を伸ばしたなら、きつと綺麗なのだろう。AR-15はもったいないと思い、いつの間にかその髪に手を伸ばしていた。

「……どうした」

「髪、伸ばさないのでですか？」

「必要ないさ。俺には邪魔だから」

「きつと綺麗ですよ。意外とサラリとしてて、艶もいいですから」

「……昔は少し長かった。でも寝癖が酷くて、ライオンヘアってあだ名つけられてから短くしてるんだよ」

そんな余りにも滑稽な理由に、思わずARR-15は噴き出してしまふ。人の評価なんて気にしない、ゴーンマイウエイな指揮官がそんな事を気にしていたという事実、笑いがこみ上げたのだ。

「何がおかしい」

「だって、人形性愛者とか変人と言われても気にしない指揮官ですよ？ライオンヘアって言われたのを気にしていると思うとどうしても……」

「うるせえ、ハイスクールの時なんだから」

指揮官は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。そこへ助け舟を出すかのように、紅茶とケーキが運ばれてきた。

紅茶の香りが鼻をくすぐる。デコレーションの美しいケーキは見ただけで口の中を甘くしてしまふ。

そして、その時間を共有するのが楽しい。同じ話題で笑い、楽しんで、一緒に食事をする。警備と言うより、本当にデートのようだ。

いつもの服を脱いで、銃もケースに仕舞っているから、気を抜いていられる。スコープの狭い世界から目を離せば、広い世界もあるものだ。

この休憩が終わったら、基地へ帰還することになる。楽しい時間はこれで終わりだ。少しでもゆつくり話して、ゆつくり食べて時間を引き延ばそうか。

そして、次に指揮官と巡回任務に着くのはいつだろうかと、AR—15は楽しみに思っていた。